

# 母の 654 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

こどものメイゲン⑥ 2

わたしの原風景⑤／あべ弘士 3

子どもの「そばにいるかたち」／小西貴士 4

『いすちゃんです。』刊行記念インタビュー 6

新刊紹介／中川ひろたか、二宮由紀子 7

イラスト／南塚直子



## 逸脱の喜び

岩瀬成子

小学生のころから、わたしは親のいうことを素直にきかない子どもだったらしい。

そうしようと思っていたわけじゃないのに、親のいうとおりにしようとする、なんだか体がむずむずする気がしてついつい反発し、そうすると叱られた。「早く寝なさい」といくら言われても、親が寝てしまったあと1人起きて、布団の中で漫画や本を読み、したがって朝はなかなか起きられなかった。「お茶碗を洗ってちょうだい」と言われれば、「どうして女が洗うって決まってるの」と言い返し、「宿題をしなさい」と叱られると、たちまちしたくなくなるのだった。ああしなさい、こうしなさい、と親に言われつけるのが嫌だった。学校では先生に教えつけられ、正しいことをするように言われつけ、そのことになんとか疲れていた。親の期待にも先生の期待にも、できることなら応えたいけれど、どうしてもできないのだった。毎日「できない」ばかりが積み重なっていくような気がしていた。

だから、漫画や物語の本を読むのが好きだったんじゃないかなと思う。親や先生の言う「世の中とはこういうものだ」や「社会のきまりはこうだから従いなさい」や「正直で素直で元気で明るく、ちゃんと勉強するのがいい子である」から、わたしは逸脱<sup>いつだつ</sup>したがっていたのだと思う。『不思議の国のアリス』が好きだったのは、きまりきった事柄が<sup>くつがえ</sup>つきつぎに覆されて、意味がひっくり返っていくのが楽しくてしょうがなかったからだろう。どこかに<sup>うきあな</sup>兎穴はないものだろうかため息をつきながら、夏休み、風通しのよい畳の部屋に寝転がって読んだのを覚えている。

「この本が面白いよ」と薦めてくれる大人もいなかったから（もしもそういう人がいたら、その人の言いなりにはならなかったような気がするが）、手当たりしだいに読んでいた。ケストナーも好きだったし、アンデルセンも好きだったが、シリーズものの評伝もいろいろ読んだ。「山中鹿之介」までも。ほかに神話や、リライトされた「里見八犬伝」や、同時に小説も読んでいた。モーパッサンとかゾラとかデュマとか。漫画は貸本屋で毎日のように借りていた。

わたしは大人が子どもを訓導しようとする言葉から逃れたかったんだと思う。読書はわたしには逸脱の喜びだった。親や先生の知らない世界を味わう喜びがあったから、なんとか子どもをやっていたんじゃないかな、と思う。

(いわせ じょうこ／作家)



## こどものメイクン 6

■着替えの途中でかばんの準備をしているパパ。

ワイシャツにハーフパンツ姿なのを見て

「どこにいくの？」

— おしごとだよ。

「パパ、おしごと、かわったの？」

はっとする子どもの一言を、シチュエーションを添えて、お寄せください。氏名・住所・電話番号・お子さんのお名前と年齢・お子さんのお名前の掲載の可否を明記のうえ、童心の会(p8)まで。掲載させていただいた方には絵本を1冊プレゼントいたします。

# わたしの原風景

5

あべ弘士

あべひろし／絵本作家



小学校の野球部に入れるのは、三年生からだ。さっそく入った。ぼくはだれよりもチビで、だれよりも足がおそかった。でも、野球がすきだった。

そうなのだ。あのころ少年たちのスポーツは野球しかなかった。サッカーはもちろん、卓球もバドミントンもみたこともなかった。プロ野球は長嶋選手が大活躍で、北海道のみんなは全員、巨人ファンだ。少年たちの野球ユニフォームの背番号はみんなあこがれの「3」だ。王選手の「1」より、「3」だった。

ぼくの母さんは、小学校を卒業するとすぐ縫い子になり、結婚してぼくたちが生まれてもずっとミシンがけをしていた。だからぼくの野球のユニフォームも母さんがつくってくれた。

「背番号は『3』だよ、母さん」

ぼくは外野のライトを守らされていた。ボールは、ぜんぜんこない。たまにくるとしたら、ファーストがエラーしてころがってくるときだ。ひまた。横の草むらでキリギリスがなっている。きになる。

女の子がキャーキャー応援している。ファインプレーして、かっこつきたい。でも、ボールはまったくぼくのそばに近づこうともしない。ひまた。

「なんだが……ポーツと……ねむたくなつて……ウツウツ……。とっ、とおくから、声がきこえてくる……。」

「オーイッ、ライト、大きいのがいったぞー。」

「バック、バックオーイッ」

ぼくは空を見あげた。

「わーっ」

見あげるタヤケの空いっぱい、つなぎトンボがうめつくし、西の山なみにむかって、ゆっくり飛んでいた。ぼくは口をあけたままいつまでも見とれつつつけた。

「オーイッ、ライトオーイッ」

難病の子どもたちのための  
キャンプ場

北海道滝川市に「そらぶちキッズキャンプ」という、医療ケア付きのキャンプ場があります。現在国内に約二十万人以上いるといわれている小児がんや心臓病などの難病とたたかう子どもたちのための施設です。難病を抱え生きる子どもたちやその家族が、北海道の大自然に抱かれ、病氣のことを忘れひと時を過ごし、「楽しい思い出」「すばらしい仲間」「生きる力」「希望」を得ることを目標に、多くの個人や企業からの寄付で運営されています。

キャンプ場には、医療スタッフや自然体験プログラムを提供する常駐のスタッフがいます。加えて、キャンプ開催時のみ集まってくる医師やボランティアスタッフがいます。現在キャンプは年に十一回ほど、難病の子どもやその家族を招待して行われています。キャンプでの活動は、そのとき参加するメンバーや季節によって柔軟に変化しますが、乗馬や森の散策、野菜の収穫、雪あそびなどを楽しみます。そんなキャンプの様子を私が撮らせてもらうようになった、十年が過ぎました。

私には写真家のほかに、森の案内人と

## 子どもの「そばにいるかたち」

小西 貴士

こにし たかし／森の案内人であり、写真家。八ヶ岳南麓の森で子どもたちと過ごしながら、子どもを含む「命を巡るうまく言葉にならないこと」をテーマに写真を撮り続ける。



いう肩書きもありますが、十九年前にはじめて仕事として森を案内したのが、小児がんの子どもたちでした。子どもたちとどう関わったらいいのか悩む私に声をかけてくださったのが、そのキャンプの主宰者の一人だった細谷亮太医師でした。その後、細谷先生とのご縁が続き、現在先生が代表理事を務められているそらぶちキッズキャンプと出会ったのです。

「そばにいる」という関わり

そらぶちキッズキャンプでは、いろいろな人に出会います。参加者である子どもたちはもちろん、そのご両親やきょうだい、医師や看護師、乗馬や調理や体験プログラムのスタッフ。この十年間、カメラを通して、そんな人と人の関係性をゆったりと見させていただくことがありませんでした。そのなかで強く印象に残っているのが、「そばにいる」ことのおさまさまなあり方です。

動物が怖い、ニンジンが嫌い、薬を飲むのが苦手……。キャンプに参加している子どもにはさまざまな事情があり、感情があります。そしてその感情の動きに合わせるようにして、その子なりの「かたち」が表情やしぐさとして表れてきます。それは自分の意思で全身の筋肉の多

くを動かせない子どもたちであつてもまったく同じです。まぶたを閉じたり、口を結んだり……、近くで見ていると驚くほど豊かに、その子なりの「かたち」を表します。

そして、さらぶちキッズキャンプには、そんな子どもたちの「かたち」のそばに、いろんな大人がいます。動物が苦手な子どもへのそばには、人の言葉より動物の言葉が得意そうな乗馬スタッフのおじいちゃんや、ニンジンが嫌いな子どもへのそばには、今日のニンジンはいつもとは絶対違うよ！と目を輝かせた調理スタッフのおねえさんが。薬を飲むのが苦手な子どもへのそばには、今日はなにジュースで飲む？とやさしい看護師さんが。ほほえむだけの関わりもあれば、じっくりと向き合つて言葉を交わす関わりもあり、大人もまたそれぞれが葛藤を抱えながら、それぞれの立場、それぞれの「かたち」でそばに居るのです。

でもこのキャンプでは、子どもたちがなにかを「できるよつ」になる「ためだけ」に関わっているわけではありません。「できるよつ」になること「は大きな喜びのひとつですが、難病の子どもたちがそうではない子どもたちと同じよつにできるよつになることはとても難しいのです。それ以外の喜び、たとえば、はじ



右ページ右／馬に会って緊張気味のゆいちゃん。名物乗馬スタッフのヒロシさんがゆいちゃんの手をとって、馬の鼻の穴へと…！

右ページ左／森をわたる心地いい風に吹かれるはると君。看護師さんは、はると君をそうっとしておいて、自分もリラックス。

上／薬を飲むことが続いている人にとって、その時間の意味を少し変えてくれる人は、きっと魔法つかいのような存在。

めにキャンプの目標として紹介した「楽しい思い出」や「すばらしい仲間」と出会うこと、が大切になってきます。それによって「生きる力」や「希望」が湧いてくるとしたら、痛みや我慢や不安を抱えながら生きる子どもたちにとって、どれほど大きな財産でしょう。

はると君たちの「かたち」

あるキャンプで、はると君という男の子が、横になったまま移動できるよう特別に改良された車いすに乗って、ツリーハウスにやって来ました。ツリーハウスのデッキには、林内を渡る風が心地よく吹いています。はると君はなんだかとても気持ちよさそうです。思わず「気持ちいいねえ」と私がつぶやくと、そばにいた看護師さんが、車いすに付けた機器にかぶせた布をめくりあげて、ニコニコと

目配せ。はると君の心拍数や脈拍はとても落ち着いた数値だったので。はると君は「気持ちいい！」と言葉にして言うことはありませんが、そのとき、彼は確かに心地よかったわけですよ。

そばにいたお医者さんも看護師さんもよく冗談を言われる陽気な方でした。でもこの時間、二人ともはると君に多くを語りかけませんでした。いつも在宅医療ではと君に関わっている二人からすれば、この心地いい時間が彼にとってどれほどかけがえのない時間か、彼の表しかすかな「かたち」から、瞬時に読みとられたのだと思います。私は、二人のさりげない「そばに居るかたち」を見て、とてもあたたかな気持ちになりました。

今の時代だからこそ

難病の子どもたちの「そばに居るか

ち」に正解はありません。私たち大人は、目の前の子どもが表す「かたち」を読みとり、それぞれが思う「かたち」で、その子のそばにいます。私自身、さらぶちキッズキャンプで、さまざまな「そばに居るかたち」を見ているうちに、十九年前と違ってすいぶん自然に私の「かたち」でいられるよつになりました。そしてこの感覚は、何も、難病の子どもたちに限定されたものでないこともわかってきました。

この百年の間に、子どもの死亡率は急激に低くなりました。生きることがかなう時代は、生きていてほしいという願いよりも、よりよく育ててほしいという願いが強くある時代でもあります。いろいろに追われるがあまり、子どもへの「そばに居るかたち」の正解探しをしてしまいがちな時代だからこそ、「そばに居ることの意味を改めてじっくり考えたい」と思うのです。

さらぶちキッズキャンプには、さまざまな「そばに居るかたち」がありますが、私たちにさまざまな問いを投げかけています。しかし、その姿は誰もが目にできるものではありません。だからこそ私は写真に撮ってみなさんに伝え、「そばに居ることの意味をいっしょに考えられたらいいと思っています。」

子どもに身近な「もの」を主人公に、なにげない一日を楽しく描く「たのしいいちにち」シリーズ。新作『いすちゃんです。』の刊行を記念し、作者のとよたかずひこさんにお話を伺いました。

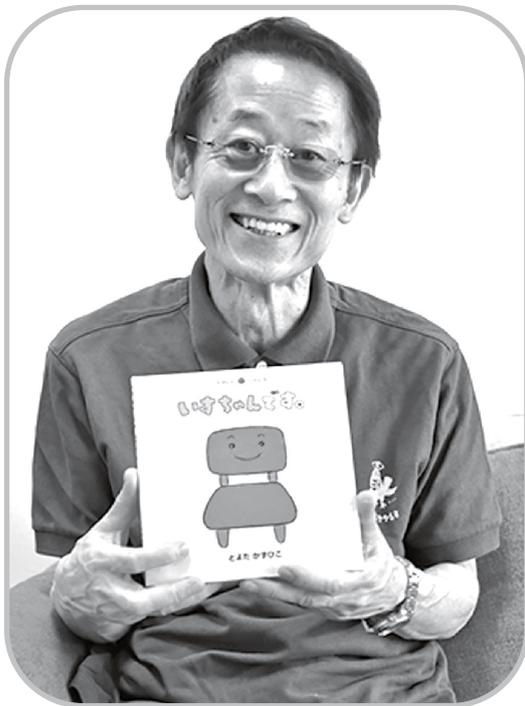
## 『いすちゃんです。』刊行記念インタビュー

——「たのしいいすにす」シリーズが生まれたきっかけを改めて教えてください。

紙しばい『いきまき』とつながると、かげふんかあさんと井井へんがちゃんのお話(『す』(二〇一五)を作ったことです。かつて団地暮らしをしていたころ、家族全員の手拭を干すのが私の役割でした。日光に干して、そのふかふか布団に寝るこの気持ちよさ、爽快感を描きたいと思い、この作品を作りました。

紙しばいを作ったあと、身近な「もの」を主人公にした絵本を作ろうという話になりました。子どもたちは「もの」にこだわりを持っていて、例えばタオルやボールなどにも、「自分のもの」という意識がありますよね。「たのしいいちにち」というシリーズタイトルを決めてスタートしました。子どもたちと同じように「もの」にも一日があって、そして、子どもたちと「もの」とのいい関係を描ければ……とアイデアを膨らませていきました。最初にできたのが『まへうちちゃんです。』と『リュックちゃんです。』でした。

——四作目の主人公はいすです。いすを選んだ理由について教えてください。



『いすちゃんです。』  
とよたかずひこ／さく・え 本体価格 800円＋税

「もの」を描くというには、それを使う暮らしを描くということなんです。いままで、このシリーズで描いてきたまへうちやリュックなどは擬人化して手足をつけ動き回らせていますが、暮らしの中にあるいすには始めから脚がついている。それゆえ歩き出しはいけな(笑)。

いつも動かすところについて、誰かが来てくれるのを待っている、本来の姿のいす。この作品ではネコやスイカ、洗濯ものがやってきます。私たち人間にしてみると、いすは「とりあえず置く」という場所でもある。重たいスイカを買ってきて、とりあえずどっこのいすに、洗濯ものを取り込んでとりあえず……。と。いすにしてみれば、本意ではないかもしれないけれど(笑)。いすは本当は誰かに座ってもらいたいと思っていて、そして、やっとご主人の男の子が来てくれた、ということなのです。

いすは、快適な居場所です。幼子にとっても同じ、小さいながらに「自分のいす」にこだわりがあって、大事にしています。一方、いすは自分では動けないけれど、いつもかわらずそこにいると主張しているのです(笑)。

——裏表紙を見ると、男の子といすがとてもいい関係であることが伝わってきて、見ている子どもたちもきっと嬉しくなると思います。

そんなふうに読んでもらえたらと思います。このシリーズでは、「たのしいいちにち」というタイトルの通り、なにげない一日の中にある楽しさを伝えたいと思っています。子どもとの毎日は慌ただしいとは思いますが、お父さんお母さんにはかけがえない時間を大切に、この絵本もへり返し楽しんでもらえると嬉し(笑)です。

(聞き手 編集部)

## いわば「王道」の絵本



『まんまちゃんの  
ボールがポン!』

中川ひろたか／作  
長野ヒデ子／絵  
本体価格 900円＋税

中川  
ひろ  
たか

長野さんとは、けっこうな友だちだ。家も近い。いっしょにお芝居もしたし、陶芸も工作もした。もちろんお酒も飲む。歌舞伎にも行く。すっごく、仲良しだ。2人が組んだら、なんか、やさしい、のんびりとした絵本ができた。仲良しコンビだからできた絵本と言ってもいいのかもしれない。

まんまちゃんの投げたボールが、コロコロころがっていく。「まてー」と追いかけるが、ボールはどンドンころがって……。

絵本の王道といったものがどんなものかわからないけど、子どもたちの楽しい気持ちや、うれしい気持ちをふくらましてあげるような、そんな絵本を最近ついで、見かけなくなった。こんなほんわかした絵本、出版しちゃって大丈夫かなあ。こんなのは、もう、ウケないんじゃないかなあ。

いやいや、そんなことはないよな。いつの時代だって、どこの国だって、子どもは子どもだ。純粋で、素直な心をもった子どもだ。ぼくは、その普遍を信じている。だから書けるし、そこで書く。ぼくの中にいる子どもと、今の子どもたちは、何も変わらない。3歳の子と、ぼくは61歳の差があるし、長野さんに至っては、それ以上だ（失礼）。しかし、この絵本を読んだ時、そんな差は、ひょいとなくなるはず。ぼくたち仲良しコンビが作った、いわば「王道」の絵本です。ぜひ、子どもたちに届けてあげてください。  
(なががわ ひろたか／絵本作家)

元昆虫少女の私にとって最初、得田之久さんは「素晴らしい虫の絵本を描く・書く人」でした。ところが、じき得田さんは「素晴らしくおもしろい虫の絵本を書く人」にもなられました。そして近年では得田さんといえども「素晴らしくおもしろい絵本を書く人」として有名です。新刊『ぼんだがころんで…』も、もちろんのこと、素晴らしくおもしろい絵本です。

何が素晴らしくと言って、これは小さい子どもから大人まで、だれが読んでも楽しい「ことばあそびの王道」絵本でありながら、「王道」にありがちな「予想通りの定番の笑い」の退屈さが一切ありません。読者の予想をすいすい裏切ってもらえる気持ちよさ。飄々<sup>ひょうひょう</sup>と自由な得田さんのことばを受けて、たるいしまこさんの奔放な絵の魅力が爆発し、ページごとに新鮮な笑いを増幅させてくれます。

この絵本を読んだ子どもたちはきっと、読ませてもらえなかった子どもたちより、ちょっと頭がやわらかくなって、ちょっと人生を生きるのに楽にかしこくなるんじゃないかしら？ どうぞ「子どもにこんな知識は不要では？」とか「子どもにこの絵はわかるのか？」なんて頭の固い心配はせずに、未来ある子どもたちにのびのび楽しく、自由で幅広い人生の豊かさを感じさせてあげてくださいませ。  
(にのみや ゆきこ／童話作家)



『ぼんだがころんで…』

得田之久／作  
たるいしまこ／絵  
本体価格 1300円＋税

BOOK

楽しくて自由！  
子どもたちの未来にエール！

二宮由紀子

# 11月の新刊図書!

だいすき絵童話

## まえばちゃん

かわしまえつこ/作

いとうみき/絵

本体価格 1000円+税



まえばちゃんは、ななこの絶対の味方。いつも勇気づけてくれます。子どもの成長を楽しく描く、第9回絵本テキスト大賞優秀賞受賞作。

だいすき絵童話

## 二年二組のたからばこ

山本悦子/作

佐藤真紀子/絵

本体価格 1000円+税



たからくんのおとしものを見つけたら入れておく箱が「たから箱」。たからくんが日直になった日、生活科室のかぎがなくなって……。

### 読者の声

松谷みよ子 あかちゃんの本

いいおかお

松谷みよ子/ぶん

瀬川康男/え  
本体価格700円+税



六か月に入ったばかりの息子に読んであげましたねこやいぬ、ぞうさんが登場するたびに私の顔をびっくりしたように振り返り、「にゃー」や「わんわん」と読むたびにニコニコ笑います。最後まで読み終わる前に、息子が「いいおかお」になっているのを見て幸せを感じました。この絵本のおかげで、温かくて優しい時間を過ごすことができました。ありがとうございます。

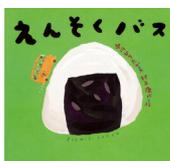
(東京都 M・一三〇歳)

ピーマン村の絵本たち

えんそくバス

中川ひろたか/文

村上康成/絵  
本体価格1300円+税



『えんそくバス』の本は、私のいとこが読んでいたのですが、私の子どもが生まれて譲りうけたものです。上の子は女の子で四歳ですが、二歳の

ころから夜寝る前に三回読むのが日課でした。今は下の男の子が二歳で、毎晩毎晩三回ずつ読むようになり、今ではページをめくるだけですべて暗記して読めるようになりました。(略) 読まない日や違う本を読む日を抜いて、だいたい三〇〇日×三回×四年＝三六〇〇回も読んでいます。こんなに読んでも毎日飽きることなく、「おやつなにもっていく?」からはじまり、「みぎにまがりまーす」とか、長い滑り台をなぞったり、おにぎりをたべる真似をしたりしています。(略) 中川先生ありがとうございます。(三二歳)



イラスト/南塚直子

2018年11月15日発行(毎月刊)

母のひろば 第654号  
定価50円(年600円/送料とも)

発行所: 童心の会  
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6  
株式会社童心社内  
電話: 03(5976)4187  
03(5976)4402(編集)  
編集発行人: 大熊悟  
童心社のホームページ:  
<https://www.doshinsha.co.jp/>  
デザイン: 谷口広樹

### 定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



### あとがき

●子どもの頃、秘密基地が好きでした。学校のプールの下空間、近所の小学校建設予定地などを基地にしました。そこに駄菓子を持ち寄って食べるくらいのことが、やたら楽しかったのです。これを、親が立派な基地を用意してくれ「さあ、遊べ」と言われたら……さっぱり楽しくないでしょう。子どもには、自分たちだけの自由な世界が必要なのですね。◎

●初めてのキャンプ。青く整ったコンロの火しか見たことのない娘は、「ひって、いろが、みつがあるよ!」「あ、いま、ひがとんでった!」と興味津々たき火を覗き込みます。『ロウソクの科学』がいつも理解できない私は、まもなく飛んできそうな娘の「なんで?」を恐れつつ、まずは着火剤なしでたき火を作れる大人になりたい、と思いました。▲